

## ステラの君と踊る

田 中 海 菜 音

（あらずじ）

人気インフルエンサーの岸田木蓮は、大学内で完璧イケメンと話題の佐藤太郎がストーカー被害で悩んでいることを知る。アセクシャルである岸田は自身が恋人をつくることは難しいと思っていたが、これはチャンスと佐藤太郎に近づき、偽の恋人関係になつてストーカーを追い払わないかと持ち掛ける。佐藤はストーカーを追い払え、自分はイケメン彼氏がいるというステータスとSNS上でのネタを手に入れることができた。

と、喜んでいたのも束の間、佐藤から衝撃の告白——実は自身が地球外生命体で、さらには偽の彼女のはずの岸田を本当に好きになつてしまった、とグロテスクな宇宙人姿を露わにして打ち明けられる。そんな佐藤のことを心底気持ち悪がる岸田であったが、人間に擬態している美しい佐藤自体はインフルエンサー活動に利

があると判断し、関係を続行。佐藤は岸田に脅され、邪険に扱われ、利用されていることを理解しながらも、愛する人の側にいられるなら、とむしろ喜んでいる様子。

互いの利害が一致し、順調に進んでいた偽の恋人関係。しかし、岸田のネット上での炎上を機に綻びが生じはじめる。

ある匿名のアカウンントが、岸田が整形をしていたことを暴露したのだ。そして、いじめや佐藤への付きまといなど、身に覚えのないことまで事実のように拡散され、応援してくれていたファンまで離れていく。腐った田舎で生きていた弱い自分に誇れるように、馬鹿にしてきた地元の人間より優れた自分であるために、と積み上げてきた「岸田木蓮」の全てが砂のように崩れていく。

強がり、平気な振りをしていても、それを隠すことができないほど傷心する岸田。佐藤はそんな岸田を気にかけて励ますが、人間

とは異なる常識を持つ佐藤の言葉は、岸田と揉める原因となってしまう。それでも変わらず岸田の元を訪ね、そして心配し続ける佐藤の姿を見た岸田の気持ちは少しずつ変化していく。

だがそれと同時に、現状への焦りや不安が岸田の中で静かに募っていた。

次の日、また佐藤はあたしの家を訪ねてきた。次の日も、またその次の日も、同じようにあたしの横にいた。一人で悲しみに浸る隙さえないまま、生産性のない退屈な会話を繰り返した。学校のこと、炎上のこと、佐藤は一切触れてこなかった。人工的な平穏の中で、佐藤に泳がされてる感じ。別に不満はなかった。料理や掃除、買い出しに至るまで、全部佐藤がしてくれていたから。ただ、小さな水槽の金魚にでもなったような気分、それが以前の自分と違いすぎて、佐藤が帰ってしまった後はいつも漠然とした不安が襲う。インフルエンサーの岸田木蓮が緩やかに死んでいく。「逃げてもいい」とか、「大丈夫」とか、佐藤はあたしに耳触りのいい言葉をくれる。でも、だんだんその効き目も弱まっている。

そしてぼんやりと思いつく。まだ十四だったとき、この言葉をくれたのは家族だった。そうだ、そのときもこんな気持ちだった。

どれだけ甘えて逃げても、その先には何もなかったという恐怖。そうだ、そう。何もないんだ。ずっと前から知っていたはずだった。だからあたし、小さな水槽を割ったんだ。なのに、また水槽の中にいる。大事にしようと決めたことが曖昧になっていく。環境が変わろうと、顔が変わろうと、あたしはあたしにしかたない。その事実がただ辛い。

「……泣いてるの？」

ベッドの横で本を読んでいた佐藤が、あたしの頬を優しく擦った。

「違う」

「どう見ても泣いてるでしょ？ ほら、泣けるときに泣いときな。

人間は涙を流すとストレスが軽減するらしいよ」

「つぐう」

小さな嗚咽から始まり、自分でもびっくりするくらい汚い声が出る。

「なんだよそれえっええ」

惨めだ、惨めすぎる。また使いたくもない場所で佐藤の好意を利用して。過呼吸になりかける度、佐藤があたしの背をさすって宥める。最悪だ。涙が止まらない。消えたい、耳鳴りがする、動悸がする。最悪、最悪。

「うあー！ もう生きるのやだああ！ あんなに頑張ってきたのに、もう生きてる意味がないよお、ずっと怖いよお」

口を閉ざそうとしても勝手に言葉が吐き出てくる。涙と鼻水で顔がぐちゃぐちゃだ。泣きすぎて頭が痛い。

佐藤はそんなあたしの顔を見て、ふっと目を細めて笑った。

「んで笑うんだよお！ クソツコおおお」

「ごめんごめん。なんか、安心してさ」

「人の泣き顔見て安心すんなああ！」

「違う、そういうんじゃないよ。岸田さん、こここのところ無理して笑ってたでしょう？ 僕は君が好きだからすぐ分かるんだ」

ふふん、と鼻を擦り、あたしの顔を覗きこむ。そして、「泣けて良かった」とまた笑った。佐藤のモスグリーンの混じった瞳が弧を描く。それに安心して自分の言われないようにしていた言葉がぼろりと口から零れ落ちた。

「……もうしんどい。あたし、SNSやめる、インフルエンサーなんかもうやらない」

佐藤は少し驚いたあと、小さく頷いた。

「そっか……分かった。じゃあ、インフルエンサー引退記念として、明日気分転換に出かけない？ 見せたいものもあるし」

「やだよ、疲れる」

「どうして？ きつと楽しいよ」

真摯な眼差しで言われ、あたしはひどく動揺した。頭によぎるのは、ここ数日の全ての世話を佐藤にさせていたこと。佐藤が勝手に押しかけたとはいえ、さすがのあたしも良心が痛んだ。

「はあー、分かった。行くよ、行けばいいんだろ」

佐藤は子どものように「やった」と声に出し、ベッドに肘をついた。泣いたせいで醜く腫れているだろうあたしの顔をじつと見つめている。目が合う。瞳が揺れている。

「ねえ、岸田さん。意味なんてなくても大丈夫だよ」

「え？」

突然の言葉にあたしは身構えた。

「さっき、言ってたでしょ。生きる意味がないって」

依然その瞳はこちらに向けたが、揺れはもう収まっている。

「僕ね、君に出会うまで生きる意味がなかったんだ。生きるなんてことは、ただ食べて、寝て、息がしやすかったらそれだけで良いっていうのが、僕の星の共通認識だったから。今でもこの考えは変わらないと思う。意味なんてオプショナルみたいなものだしね」

真っ直ぐ見つめられた視線を逸らせないまま、あたしは佐藤の言葉に耳を傾けた。穏やかに紡がれる言葉が固くなった体に浸透していく。

「でも、地球人はそうじゃないことが多い。生きることの中に夢や目標があったりするでしょ？ 僕は地球のそんなところに魅かれたし、すごくロマンチックだと思ってけど、だからといって無理に意味を探そうとする必要はないと思うんだ。だって、なくて当たり前だから。僕らは神でも超越者でもないただの動物。いつか死ぬ。もっと気楽でいいんだよ」

緩く微笑む佐藤の顔は、夏の日に優しく照らされている。そして、思えばこのとき、地球の常識に捕らわれないこいつの言葉から、あたしは無意識に正解を探していたのかも知れない。

「……じゃあ、生きる意味だっと思ってたものが、分かんなくなっちゃったら？ どうしても意味が欲しいときはどうしたらいい？」  
佐藤はあたしの顔にかかる髪に手を伸ばし、ふわりと耳にかけた。

「焦らないで。分からなくなっただけのものはいつか思い出せるよ。それに、もっと素敵なものに出会えるかもしれない。僕は百年間意味のない人生を送ってきたけど、百一年目は岸田さんに会えた。この星は素敵なものに溢れてる。最悪で、退屈で、意味のないように感じる日々だって、それが積み重なった先に意味を付けたくなるような瞬間が来るよ」

そう言って、佐藤はまた愛おしそうに目を細めた。窓から差す

日差しが、少しずつ、淡く、オレンジがかりはじめる。

「そっか……うん、そうだといいな」

佐藤の言葉があたしの欲しかった正解かは分からない。ただ、なぜか安心している。久しぶりに、本当に少しだけけど、明日を迎えるのが怖くないような気がした。

その日の夜。あたしは夢を見た。

ふわふわとひとり都会の空を泳いでいて、ヒカリエより少し低い位置から渋谷駅を見下ろしている。誰もあたしに気づかない。罵らない。カメラを向けない。そのときあたしは、ずっとこうなりたかったような気がした。最高に自由で、最高に孤独で、なんだかおかしくて笑った。だけど、望んでいたはずの状況に、だんだん悲しくなって、ポロポロ涙が出てきて、そしたら空から大きな手が生えてきて、あたしをゆっくり抱き上げた。顔は見えないけど、その手の持ち主は「大丈夫、大丈夫」と言っていた。穏やかで少しこもった声が佐藤のと似ていた。

インターホンが鳴る。ティントンと電子音が耳をついた。

まだ半分寝ている身体をゆっくり起こし、目を擦る。部屋の時計は八時を指しており、日があるから多分朝だと当たり前のことを考えてベッドから這い出た。こここのところ変な時間に寝ていた

「からか、久しぶりに人間らしい朝を迎えた気がする。」

「おはよう、岸田さん」

「ふらふらと玄関のドアを開けると、嬉しそうに笑う佐藤がいた。」

「今日はこいつと久しぶりの外出をする。普通なら断固拒否するが、ここ数日の借りを返す必要があった。あたしは超絶現代っ子の自覚があるけど、これでいて結構義理堅いんだ。」

「ねえ、ほんとに行くわけ？」

「けど嫌なもんは嫌。ぎりぎりまで粘ってみる。」

「行こうよ！」

「即撃沈、やっぱり行かなきゃならないらしい。ほんとにあたしが心配なのかよ、と突っ込みたくなるのを我慢して、静かにため息をついた。だってこいつは宇宙人だ。今更常識に触れてどうこう言うのはなんか格好悪いじゃんか。」

「はあー、分かったよ」

「今度はわざとらしくため息をつき、あたしは佐藤にソファで待つよう促して洗面所へ。洗顔をし、化粧水、乳液を塗って、ようやくドレッサーの前に座る。あたしを美しく魅せるために置かれたメイク道具たちをしばらく眺め、順番に手に取っていく。中にはファンの子たちからもらった化粧品もいくつかあって、それを見る度にその子の顔やSNSのアイコンが思い浮かんだ。結局、

あたしは一週間以上SNSをひらけていない。この化粧品をくれた子たちの中には、もうあたしを好きじゃない子も沢山いるだろう。なんだか、胸がすごく痛い。ファンなんてマウントを取るための道具だと割り切っていたけど、もうそういう感情になれなくなっていた。

「一時間と三十分。ストレスで荒れた肌には上手く化粧がのらず、思ったより時間がかかってしまった。あーでもない、こーでもない色々悩んだ末、メイクは夏っぽいコーラルメイクに何とかまとめ、服もそれに合うカジュアルなものがいいと思って適当に揃える。佐藤が白いTシャツに太めの黒いパンツだったから、あたしも色味はモノトーンにした。でも少し寂しい気がしたので、カバンは気持ちくすんだオレンジ色のものを選ぶ。」

「佐藤、終わったよ」

「着替えを見ないようにとソファから洗面所に移動していた佐藤に声をかける。」

「うん、素敵だ」

「はにかむ佐藤に「知ってる」と返し、あたしは玄関へ向かった。スニーカーのヒモを結ぶ手が震えそうになるのを抑えて、あたしは一度大きく息を吸い、ちらと佐藤に目をやる。能天気なわくわくと目を細める姿はアホっぽくて、力みが程よく抜けていく。」

「じゃあ、行こうか」

佐藤がゆっくりとドアを開ける。瞬間、暗い玄関に夏の日差しが差し込んでくる。温い風が頬を震める。じりじりと暑い夏の空が視界に写った。あたしは半ばやけくそな勢いのまま立ち上がり、外へ飛び出す。

「うあ」

刺すような日差しに目が眩み、クーラーで冷やされていた身体が熱を帯びる。

「外だ……外すぎる」

今すぐ部屋に戻りたいと喚きそうになるのを我慢して、熱されたコンクリートを踏んでいく。人通りの多くなる商店街からはマスクと帽子をつけて歩いたけど、視線が怖くてずっと下を向いていた。もちろん目立つ佐藤にもメガネやら帽子やら被せたが、それで気が収まることはなかった。駅前付近までいくと佐藤が呼んでいたらしいタクシーがあり、中で待っていた浅黒い肌の運転手が白い歯を出してあたしたちを迎えた。

車窓から見える人や建物を目で追って、運転手が無言でつけ始めたラジオを聞き流す。リクエストで流れた九〇年代のラブソングを、佐藤は嬉しそうに聴いていた。

「そういえばさ、今日何すんの」

ふと今更そんなことを疑問に思い、佐藤に声をかける。出かけるといつても特に欲しいものとかやりたいことはない。どうせ佐藤が計画を立てているんだらうけど、あまり期待はしていない。だって佐藤だし。

でも、あたしにだって心の準備があるのだ。目的地がより都心に近づくのであれば尚更だった。

「前、岸田さんが連れて行ってくれたフレンチのお店があるでしょ？ ほら、今の関係になろうって誘ってくれたときの。そこでランチを食べようと思って予約していたんだ。僕のおすすめのお店もあったんだけど、岸田さんが苦手なものだったら怖いから安全な方を選んでしまった」

照れくさそうに微笑んで、スマホを取り出す。

「見て、午前中限定のフルコースがあるんだ。すっごく美味しそうでしょ？ 個室を予約したからのんびり食べよう」

今日のために色々準備をしていたようで、楽しそうに計画を説明し続ける。

「そのあとは映画に行くのはどうかな？ もしくは、前君が好きだったブランドのポップアップショップがあつてね。そこに行くのもいいよね。あ、それとね！ 実は……」

「おいおい、兄ちゃん！」

佐藤の説明を制するように、運転手がにやけながら声をあげる。

「こういうときは、最後まで言わずにサブライズにしとくもんだぜ。な、彼女？」

「え、あ……はい」

久しぶりに佐藤以外の人物に話を振られ、心臓がドキリと跳ねる。全然内容を知りたいのに、思わず頷いてしまう。

「僕、喋りすぎちゃってみたいだね。ごめんね」

頭をかいて、恥ずかしそうに謝る佐藤。違うんだ、そうじゃないんだと切り返したかったけど、「若いねえ!」「青春だねえ」なんて冷やかすおっさんの前ではそんなことを言えるはずもなかった。

十時半にはレストランに到着し、二人で大きな窓のついた部屋で料理を食べた。運ばれてくる料理はどれも絶品で、やっぱりそこそこする店だけあるなと下世話なことを思った。特に杏仁豆腐と林檎のグラニテが爽やかで美味しく、どの会食や打ち上げでも食べたことのない味わいに自然と口角が上がる。以前佐藤と来たときは、料理への意識が半分、交渉を成立させなきゃって意識が半分だったから、今日はきちんと堪能できて楽しい。シテイビューを背景に、佐藤はそんなあたしを見て嬉しそうに笑った。上品に料理を口へ運んでいく様は西洋絵画のようで、そういえば

前までフランスにいたんだよなーとか、ぼんやりとどうでもいいことを考えながらシャンパンをちまちま飲んだ。

十三時すぎ、あたしたちは佐藤の提案通り映画館にいた。ポツブアップシヨップへは思いのほか興味が湧かず、かと言って佐藤の見たがっていた恋愛映画にも魅かれなかったが、海外ホラーが上映しているらしかったからそれを選んだ。気分が落ち込んでいるときはホラー映画に限る。感動ストーリーを見たつて興奮するだけだから、それなら（陰鬱！ 血まみれ！ 人間殺す！）つて感じの映画を見るほうがいい。佐藤は迫りくるゾンビや猟奇殺人犯、黒幕の継ぎはぎ顔の博士にひどく怯えていて、途中からは空になったポップコーンの入れ物をぬいぐるみのように抱え、目をつぶっていた。お前の皮を剥いだ姿なんかゾンビと変わんねえだろ！ と心の中でツッコんで、それがなんだか滑稽で、あたしは口を押えて笑った。

「岸田さん、すごいね。笑ってたよね」

映画館の近くにあるドーナツ屋まで移動し、お互いにアイスコーヒーとドーナツのセットを頼んだ。裏通りにあるからか、それとも平日だからか、渋谷区なのに客がまばらだ。

「うん、めちゃくちゃ面白かった」

主に佐藤が。

「はは……それならよかった」

佐藤はげつそりとした様子で背を丸めて苦笑いしている。あたしはそんな姿を見ながら少し吹き出すように鼻で笑い、ココナツツクリームの入ったチョコレートドーナツを一口食べた。ココナツツの風味がコーヒーによく合う。

「佐藤のつてさ、定番だけど、なんだかんだ結局これだつてなるやつだよね」

佐藤の前に置かれているドーナツをゆび指す。揚げドーナツに粉砂糖のふつてあるやつだ。無償にこれが食べたいときがあったりする。

「そうそう。シンプルだけど、ちゃんとジャンクなのがいい」

「いいねえ、分かつてんねえ」

窓側の席を選んだおかげで日差しが程よく差し込み、クーラーが効きすぎることもなかった。しばらくどうでもいいドーナツ談義に花を咲かせた後、佐藤が何か意を決したように口を開く。

「岸田さん、ほんとにインフルエンサー辞めちゃうの？」

「そうだよ」

あたしは雑にドーナツにかぶりつきながら、そう頷いた。最後の一口だったのに変なことを聞かれたせいも、味が曖昧になって舌で転がる。

「うん、そっか」

佐藤はそう答えると腕時計に視線を移し、「じゃあ、やつぱり尚更だね」と意味深なことを呟く。

「何？ どうしたの」

「コーヒー、飲み終わったら出よう。見せたいものがあるんだ」

あたしは「あつそ」とだけ返事をして、残りのコーヒーを飲み干してすぐに席を立った。そわそわと何度も時間を確認するものだから、どうせ何か予約でもしてあるんだろうと察してのことだった。

「あ、会計……」

「今日全部あんた持ちじゃん？ あたし払うから先に出てなよ」

佐藤は払いたそうにしていたが、別にあたしも金がないわけじゃない。むしろ何も払わせてくれない佐藤のせいで面子が立たないから、カフェ代くらい払わせて欲しい。あたしは「いいから」と何か言いたげな佐藤の背を軽く叩き、素早く会計を済ませた。

「僕が尽くしたいだけ尽くせる日だと思つてたんだけどなあ」

「残念だったな」

「ふふ、でもありがとう」

カフェから出ると、昼間より少し気温が低くなっていることに気づく。それでも暑いことに変わりはないから、自然と眉間にし



わが寄る。

佐藤はまた時計を確認し、「駅前まで行こう」と高揚した様子であたしの手を引つ張った。今日はほとんどタクシーで移動していたから、歩きであることに少し動揺して足がもつれる。佐藤は心配そうにこちらを覗いたが、駅までなら十分もないから大丈夫と振り切った。だけど足取りは重いままで、あたしは佐藤に身を任せてなんとか人混みを進んだ。なんでこんなに無理をしているのかよく分からないまま、なるだけ回りの景色が入らないよう下を向いて歩いた。駅に近づくにつれて増えていく人の数。それに比例してあたしの心と身体は嫌に重さを増していく。ぐにやりと視界が歪む。どくん、どくんと動悸がひどい。汗の量が増していき、手足の震えが始まります。行きかう人の顔がひどく引きつって見え、監視されているような気さえしてくる。話し声が、視線が、全部こちらに向いている。刺さっていく。さつきまで平穩だったはずの心を、人混みが踏み荒らししていく。あたしは佐藤の腕を強く掴んだ。

「佐藤、やつは無理かも。ちょっとしんどい」

スクランブル交差点あたりまで来て、我慢が効かなくなってきた。体温が下がっていくのを感じる。叫びたいのに力が出ない。

「ああ、気が使えなくてごめん。もっと落ち着ける場所へ行こう」

申し訳なさそうに眉を垂らし、佐藤はあたしの肩を抱くようにして支えた。そして、俯くあたしの顎をそつと持ち上げる。

「さあこつちを見て、目を瞑って」

とにかくこの苦しさを逃がしたくて必死だった。訳の分からなのまま、あたしは佐藤の指示通りに目を強く閉じる。

瞬間、身体がぐんとかかに押され、強い風がびようとかいた。足の踏ん張りが効かなくなり、たまらず目を開ける。

そして、眼前に広がるのは視界一杯の青。あまりにも非現実的な光景。

「うああああ」

あたしはたまらず叫んだ。詰まっていたものが全て空に溶けていく。譬喩じゃない、だって、これは、

「……浮いてる」

「あはは、ホラー映画は平気だったのに！ 安心して、他の人には見えないよ」

「っ、うるせえよカス！ そういうことじゃねえよ！ なんだよこれ！」

先ほどの憂鬱は全部地上に置いてきてしまったらしい。今は普通に命が惜しい。あたしはたまらず佐藤の腕にしがみついた。眼下には沢山の人、踏ん張る床はない。目線の先にはビルの屋上が

見える。浮いてる、宙に、浮いている!? なんで!? 全然意味分かんねえよ! 違う意味でドキドキしてくるだろうがクソ宇宙人!

「ごめんね、岸田さん辛そうだったから。で、僕も慌てちゃって、咄嗟に避難する場所が思いつかなくて……結果、こうなっちゃった!」

「なーにがこうなっちゃっただ! なんも面白くねーよ! 早く降ろせタコ!」

あたしはたまらず佐藤の肩に顔を埋め、背中を乱暴に叩いた。

「あ、ちよ、岸田さん暴れないで! ……あ!」

なぜか佐藤は嬉しそうに感嘆詞をあげ、「丁度いいや!」と笑っている。あたしの混乱は増すばかり。なんだこいつ、なんだこいつ! やっぱイかれてる!

「岸田さん! もうすぐ五時だ!」

「だからなんだよ!」

「目を開けてみて」

佐藤はあたしの背を優しく叩いた。あーもう知らねえ! どうにでもなれ! あたしはため息まじりで薄目を開け、もう一度眼下に渋谷の街を捉える。高い、足がすくむ。

「ほら、来るよ」

静かに佐藤が囁いた。その瞬間、軽快な音楽が街を包む。

「岸田さん、顔を上げて!」

下に落としたままの視線を佐藤の指の先へ移す。目の前。TS

U T A Y A とかスタバが入ってる大きなビルの巨大ビジョン。

あたしは息を飲んだ。

《岸田木蓮ちゃんへ》

そこへ映し出されたのは、あたしの名前。

「え」

《もくちゃん! 元気にしてますか?》

切り替わる画面。見覚えのある顔。

「え」

忘れるはずがない。

あたしを一番初めにフオローしてくれた子だ。

《初めてもくちゃんを知ったのは、インスタグラムでした。学校で居場所のなかった私は、いつももくちゃんの投稿から元気を貰ってたよ!》

急すぎて頭が追い付かない。でも、ちゃんと見たい。なのに、視界がぼやける。鼻の奥がツンと痛い。

《あたしのプレゼントしたリップを愛用してくれてたの、すごく嬉しかった! バイト頑張ってたって心から思えたよ!》

「そうだ、ローズピンクのリップ。一緒にくれた手紙のこともよく覚えてる。」

「大好きなもくちゃんのこと、あたしは信じてるよ！ 誰の言葉より、もくちゃんの言葉を一番に大切にしたいから！」

温かく、そして力強い言葉に心臓が震える。涙が、鼻水が、だらだらと顔をつたっていく。たまらず鳴咽がでる。唇を強く噛んで、涙を拭う。目の前の光景を焼き付けておきたかった。

「これからも、もくちゃんのファンでいさせてください！ ずっと大好き！」

嬉しそうに笑う画面の彼女。胸に温かいものが満ちていく。

「つう、ありがとう、ありがとう。ごめんね、ごめんね」

あたしは絞り出すに声をあげ、たくさん泣いた。佐藤と出会ってから、一生分くらい泣いてる気がする。

「ほら、まだ沢山あるんだよ」

佐藤はあたしの頬を手のひらで包み、優しく涙を拭う。そして、もう一度ビジョンを指した。画面が切り替わり、次はいつか大学で声をかけた金髪と黒髪の女の子が映し出された。その次はよくDMを送ってくれる女性。いつもコメントをくれる男の子。初めて顔を見る人も沢山いた。次々に映し出されていくあたしを信じていてくれる人と温かい言葉の数々。その度に胸が締め付けられ

る。こんなに応援してくれてる人がいたんだ。あたし、誰かの意味になってたんだ。そう思うと、また視界がぼやけていく。

動画が終わる頃には、空中の高さにもすっかり慣れていた。慣れたというか、どうでもよくなっていた。怖さはもうない。

「……佐藤がしてくれたの？」

優しく肩を支えている佐藤を見上げる。

「つうん、悔しいけどこれはファンの人たちの提案。君に声を届けようとするファンの子たちのオープンチャットがあつてね。僕はほんの少し手を貸しただけ」

「何、もしかして洗脳したんじゃない……」

「まさか！ そういうの君嫌いでしょ？ 僕がしたのは、せいぜい

広告の枠を買ったぐらいだよ」

平然と言いのける佐藤の言葉に背筋が伸びる。

「……それってとんでもない金額なのでは？」

「全然？ 前も言ったでしょ、僕はエリートかつ貯金も多いんだ」

いたずらっぽく目を細める姿に「マジかあ」と呆けた声がでる。

青と薄ピンクの混ざる空が、佐藤の後ろに広がっている。

「それよりも、君がやってきたことの一端でもいいから、君自身に知って欲しくて。君の努力や活動が、たくさん人の生きる希望になってたんだよ。これってすごいことだ」

まるで自分のことのように嬉しそうに話す佐藤。なんだか変な気分だ。さっきまで泣いていたのに、すごく心が落ち着いている。じわあ、とぬるま湯に浸かつていくような、そんな感じ。

「君がインフルエンサーをやめる前に、きちんと君のことを伝えられてよかった」

風が吹く。佐藤の髪の毛がふわふわと揺れ、夕に透けていた。薄ピンクの空は濃いオレンジに溶けていき、立ち並ぶビルがキラキラと光りだす。

「佐藤」

あたしはゆっくり佐藤に手を伸ばし、そして、勢いよくその胸に飛び込んだ。

「うあっ！ き、岸田さん……？」

まぬけな高い声を出して驚く佐藤。早くなつていく鼓動が聞こえる。

「いっぱいありがとう」

「え！ う、うん」

佐藤は両手を上に挙げたまま、ひどく狼狽している。

「あたしさ、もし応援してくれる人がいたとしても、それさえもプレッシャーに感じて、マイナスに捉えちゃったらどうしようってどこか思ってた。でも、応援してくれる人がいるってことは、あ

たしを信じてくれる人がいるってことだと思って思えたよ」

あたしは佐藤の背に回す腕に力を込めた。

「だから、きちんと思返しがしたい。時間がかかるかもしれないけど、応援してくれるファンの人ときちんと向き合える方法を探したい」

「岸田さん……」

佐藤はあたしの肩を掴み、優しく押し目を合わせる。黒の瞳が夕日に当たり、琥珀色に染まっている。

「君ならきつとできるよ」

「うん、知ってる」

しばらくオレンジの渋谷を空から眺め、あたしたちは帰路についた。家まで送りたいと駄々をこねる佐藤に付き合って、一緒に来た道に戻る。二人分の肉体を宙へ浮かすのはひどく体力を使うらしく、佐藤は少しふらついてた。あたしはこのまま佐藤を帰らせるほど薄情を極めてないので、そのままうちに泊まらせてやることにした。佐藤は最初こそ「お泊り……！」と息巻いていたが、相当疲れていたのだろう。結局二十一時前には眠ってしまった。

佐藤の寝息と、網戸越しに入る夏風が、静かに部屋で混ざっていく。あたしはまだドライヤー前の濡れたまんまの髪を指先でねじりながら、クローゼットの前に立った。

「岸田さん、本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ。だいぶ元氣」

今日は、久しぶりに大学へ行くと決めていた。昨日の夜、そう思い立った。前日から服を決め、メイクもいつもより丁寧に。体調だってそこまで悪くない。バイトも休み続けているが、まずは一個ずつ解決していけばいい。無理なら無理で引き返せばいいんだから。

たぶん、あたしは佐藤が心配するほど、もう傷心していない気がする。そりゃ、まだSNSを見るのは怖いし、不安がゼロかと言われたら嘘だけど、昨日たくさん貰った全てが、あたしにこれから考えさせてくれる。

「そ、そう？ ならいいんだけど……」

それよりも気になるのは、佐藤の態度。今朝、ていうか昨日の寝る前くらいから、ずっとよそよそしい感じがする。目もうまく合わないし、変な距離を取られるし。いつも発情期の犬みたいに近寄ってくるくせに意味分かんない。ま、考えてもしょうがねえか。だつて佐藤だし。

くちや、ぐちや、びちや。

あたしは佐藤のおかしな態度には触れないことを決め、黙々と

ヘアセットに取りかかる。今日は気分を上げたいから、アップルミュージックから気に入ってるヘビメタをガンガンにかけて髪を巻く。

くちや、ぐちや、びちや。

ジャカジャカと流れるギターの音が気持ちいい。ヴォーッと地を這うようなデスポイスが耳を刺激する。ちよつと、楽しくなってきた。

くちや、ぐちや、びちや。

「……あれ」

アイロンを持つ手が反射的に止まる。

なんだ、おかしい。さつきから異音が混ざっている。かき鳴らされるロックンロールの中に聞きなれない、ないはずの音。何度も聴いている曲だから分かる。こんな変な効果音入っていないはずだ。

流れるギター音と重なるそれに耳を澄ます。

くちや、ぐちや、びちや。

確かに聞こえる湿った音。

くちや、ぐちや、びちや。

スマホの故障か？

あたしは液晶を覗きこんだ。

いや待て、違う、ここじゃない。

そう気づいた瞬間、あたしはスマホから視線をずらして勢いよく身体を捻った。

が、時すでに遅し。二メートルはあるだろう青黒い塊が勢いよく飛んでくる。

「ひ」

どつぶ。

覆いかぶさるように重たく水っぽい何かが、あたしの身体を包み込む。幾本もの触手のようなものが視界に入る。肌に接触している部分がじつとりとべたつき、頭部から覗く四つの目玉がこちらを捉えた。

「っ佐藤、お前何してんだよ！ 離れろ！」

久しぶりに露わになった本来の佐藤。シヨックと動揺で顔の筋肉が歪む。あたしは「やめろ」と何度も叫び、気持ちの悪いその腹部に思いつき蹴りを入れた。が、皮膚が柔らかすぎて深く入らない。あたしは何度も蹴りを入れながら、温めていたヘアアイロンになんとか手を伸ばし、頭部の触手を何本か挟んだ。

「アッ」

小さい喘ぎが聞こえた後、すぐに佐藤の体が縮こまっていく。力も抜けていくのが分かる。

「どけろ！ 気持ち悪い！」

この隙にあたしは佐藤の体を自身から剥がし、もう一度蹴る。「マジで何してんだよ！」

グロテスクなその姿に背筋がぞくりと震える。どうしてこんなことを？ 何がしたい？ 気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

「うう、ふぐう、……っ」

低い声が部屋に響く。

途端、どろっとしたものが佐藤の身体からあふれ出す。あたしはその青黒い透明の液体を、前もみたことがあった。

「……佐藤、もしかして泣いてんの？」

粘度のある液体はそのまま溢れ続け、ラグの上まで侵食してくる。呻きをあげながら体が縮こまっていく。

「うう、ごめんね、ごめんね」

佐藤は何度も何度も「ごめんね」と口にし、再び擬態しようとして試みているようだった。しかし、粘液が絡まってかうまく人間っぽい皮膚が覆われてこない。覆ったかと思えばどろりと垂れ下り、その度に呻き声が大きくなる。

「うああ、ごめんね、ごめんね」

「……なに。どうしたのお前」

あたしは呆気に取られてその場で立ちつくした。

「ごめん、ごめんっ」

佐藤は粘液を放出したまま這いつくばるように玄関まで滑り進み、苦しそうに息をあげながら部屋を出た。

は……？

ルルルルルルル——間を置く暇もなくスマホが鳴る。

意味の分からない状況に脳が追い付かない。霧がかかってぼんやりとした頭、無意識に空いたままの口をそのままに、スマホを耳に当てた。

(続く)

\*本稿は、一部表記の訂正を加えた作品の一部を抜粋したものです。

(二〇二二年度卒業)